

# 言語音声の聴取経験が音声知覚に与える影響：韓国語母語話者と日本語母語話者の違いに着目して

成, 儒彬

<https://hdl.handle.net/2324/6787391>

---

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（心理学）, 課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 成 儒 彬

論 文 名 : 言語音声の聴取経験が音声知覚に与える影響: 韓国語母語話者と日本語母語話者の違いに着目して

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

第1章では、破裂音に対する日本語話者と韓国語話者の知覚の違いを取り上げ、主に韓国語話者の知覚に関する先行研究を概観し、問題提起を行った。破裂音とは、発音器官を密着させて肺から流れてくる空気を口内に閉じ込めたのち、解放させることによって作られる言語音のことである(e.g., /k/)。日韓では、互いの語頭の破裂音を対応づけて表記するうえで齟齬が見られる。日本では、韓国語の平音(e.g., /k/)が無声破裂音(e.g., /k/)に対応づけられる一方で、韓国では、日本語の有声破裂音(e.g., /g/)が平音に対応づけられる傾向にある。このような韓国での傾向はローマ字表記でも同様である。つまり、「キムチ」と「プサン」は韓国では「gimchi」と「Busan」である。破裂音の知覚に関する先行研究によると、日本語話者では破裂音の有声開始時間(VOT)が重要な役割をする一方で、韓国語話者ではVOTだけでなく、後続母音の基本周波数(F0)が重要な役割をする。これらの知見に照らすと、日韓で見られている破裂音の対応づけの齟齬は両話者の音声知覚的特徴の違いによるものと考えられる。ただし、これまで韓国語話者の破裂音の知覚を調べた先行研究は音響成分を操作した人工音声を使ってきたため、日本語話者が話した自然音声を聴く場合でも、VOTとF0が有効な役割を果たしているのかは不明である。そこで本研究では、韓国語話者と日本語話者の知覚を実験心理学的手法によって検討した。

第2章では、自然音声に対応づける知覚課題と二つの人工音声の異同を判断する弁別課題を用いて、三つの実験を行った。実験1では、日本語の有声破裂音または無声破裂音で始まる自然音声のうち、平音で始まる韓国語単語の発音としてより適切な音声を選ぶ課題を韓国語話者に実施した。その結果、韓国語話者は音声のF0の低さ、およびVOTとF0の組み合わせに依存して対応づけを行っていることが示された。実験2では、有声破裂音または無声破裂音で始まる無意味語の音声のうち、どちらがより平音で始まる音声に近いかを判断する課題を韓国語話者と日本語話者に実施した。結果として、韓国語話者では判断におけるF0単独の影響が再現された一方で、日本語話者ではF0単独の影響は示されなかった。実験3では、平音を模した人工音声とVOTやF0のみが異なる人工音声の異同を判断する課題を両話者に実施し、両話者の感度を比較した。その結果、両話者とも弁別時にF0とVOTを手がかりとして利用することが示された一方で、F0に対する感度は日本語話者より韓国語話者のほうが高かった。

第3章では、第2章の実験結果に基づき、各課題における韓国語話者と日本語話者の知覚を先行研究の知見と比較しながら考察した。そして、両話者の知覚の違いが日韓で見られている表記上の違いと一致するかを確認した。さらに、音声知覚的特徴の違いが韓国語話者と日本語話者間のコミュニケーションに誤解を引き起こす可能性や韓国語を学習する日本語話者を支援するために今後すべき研究について考察を行った。本研究の結果は、破裂音の弁別において日本語話者より韓国語話

者のほうが F0 に対する感度が高く、そのような音声知覚的特徴の違いが両話者の破裂音の対応づけの違いに影響していることを示唆する。さらに、韓国語の破裂音の習得には F0 に対する高い感度が必要であることを示唆する。